

名前：

インターネットの普及と発達によって、様々な情報が瞬く間に世界中に配信され得る現代、新聞や雑誌は情報源としては遅れをとりがちであろうが、私はそれらが未だに有用であり続けていると思う。

そもそも高度な情報社会といっても、その主な担い手はパソコンユーザーである。いまや社会人の大多数がパソコンユーザーであることは明白であるが、全員がそうではない。高齢者に限らず、比較的若年層においてもパソコンを使い慣れない者はいるだろうし、第一パソコンを持たない人もいる。携帯電話のウェブビューワや、Pcサイトビューワはパソコンの代替になり得るが、それらさえ活用できない者もいるはずである（現に私の母などは、Eメールの扱い方すら十分には理解していないほどである）。

こうした人々にとって、新聞や雑誌は重要な情報源となり得る。その需要がある限り、新聞や雑誌の必要性は残る。

第二に、インターネット経由の情報は速度は優れているが内容は必ずしも優れてはいない。新聞や雑誌は企業が頒布するものである以上その内容に責任を持つ主体が明確に存在する。一方インターネットは、もちろん責任ある企業によるサイトも多いが、大多数は無名の個人の運営するサイトであろう。これらのサイトにある情報が誤謬だとしても、その責任が自分にあると自覚して情報を発信する者は多いのかどうか。おそらくは新聞や雑誌においてよりも気軽に記事を執筆し、従って誤謬の生じる割合も高まると思われる。

また、過度な情報の受容は思考停止を招きかねない。その点において、常時洪水のように情報の氾濫するインターネットよりも、一休みの間を確保できる新聞や雑誌に有用性があると思う。

古く月並みな論ばかりと言われかねないけれども、以上のような理由から、私は新聞や雑誌の必要性を確信するものである。

1800字